

8月25日 使徒言行録17章16～34節

【解説と黙想】

アレオパゴスで語る

1. 状況

パウロは第二次伝道旅行の最中にある。コリントの町を目指していたパウロは、その道すがら、アテネに立ち寄る。アテネはギリシア文化を色濃く刻んでいる町。至るところに偶像が並んでいた。そこで、パウロの伝道魂は燃え始める。

2. パウロの現場

パウロはこれまで主に「ユダヤ人の会堂」で御言葉を語ってきた。集う人々は御言葉に親しみ、その奥義を求める人達であった。

しかし、今回は違う。相對するのは、ギリシア文化に親しむ知識人であり、彼らは御言葉を知らない。アテネはパウロにとって“完全アウェイ”の場であった。

3. アレオパゴスの真ん中で

パウロはアレオパゴスに連れて行かれる。そこは裁判所、教育機関、行政機関を兼ねたような場所であった。いつもとは勝手が違う場所でもパウロは語るべきことを語った。偶像を拝む愚かさ、万物の創造主なる神をこそ求めること。その神は神を求める者の近くにあってくださること。だからこそ、今、悔い改め、神に立ち帰らなければいけないこと。一人の方を通した裁きの日と、復活による確証。パウロは福音の中心を語っている。福音が伝わるために手段も選んでいない。人々の神観、世界観に寄り添い、ギリシアの詩人エピメニデス

とアラトスの詩(28節)も引用した。

しかし人々の反応は芳しくなかった。ある者はあざ笑い、ある者は多少の関心を示しつつも「いずれまた聞かせてもらうことにしよう」(32節)とその場から消えた。一方で、「信仰に入った者」(34節)も数人いたという。何が彼らを分けたのか。

4. 福音を聞くということ

人々を分けたのは、「死者の復活」に対する態度であり、その「復活」を実現させた神に対する悔い改めの心だった。

アテネの知識人たちにとり、死した人間が復活することは愚かな話であった。靈魂の不滅を信じる彼らはその知恵の枠からでることをしない。彼らにとり知恵は神を志向することの上にある。そこで悔い改めは起きない。聖霊は働かれない。聖霊は低くなる心に、砕かれた魂に働いてくださる。

その光景を、私たちはパウロの説教を聞き続け、神を信じた人たちの姿に見ることができる。詳細は記されていない。それでも、偶像が立ち並ぶ町の中でパウロが語るべき福音を語った時に信じる者が起こされたことは驚くべきこと。聖霊は自由なるお方。そのお方が御言葉を通して力を振るわれる時、信じる者は必ず起こされる。

その力に守られて福音を語り、福音に生き続けることへと、私たちは召されている。
(柏木貴志)

《参照箇所》 コリントの信徒への手紙一1章18節～2章4節

《教理問答》 「子どもと親のカテキズム」問35、49

8月25日 使徒言行録17章16～34節

【説教展開例】

アレオパゴスで語る

◇----- 単元のねらい -----◇

聖霊なる御神は、自由に、私たちの日々に力をふるわれ、私たちに神の御力を見せて下さる。人の目に、うまくいくこと、いかないことがある。しかし、恐れることなく、なすべきことをなし、聖霊の導く日々の中を歩みたい。そこに私たちの素晴らしい光景が広がる。

「大切なことは全部、聖霊を通して教わった」

1. アテネの町にて

パウロさんがアテネという町に来てみてびっくり仰天。町の至るところに、「偶像」という石やら何やらで刻んだ像がたくさんあったんです。パウロさんはブチギレます。本当の神さまは像なんかであらわせるお方ではない！ その神さまを勝手に作るなんてのは神さまに失礼極まりない！

パウロさんはすぐにアテネの町の人たちに語り始めました。広場でも、どこでも、出会う人たちに、イエスさまのことをお話していったんです。

2. アレオパゴスの真ん中で

そうしているうちに、「アレオパゴス」という、今で言うと学校と市役所と裁判所を合わせたような場所に、パウロさんは呼ばれることになりました。パウロさんがあまりに一生懸命に、神さまのことをお話しているので、だったら、もうみんなを集めるから、そこで好きなことを喋ってもいいよと言われたんです。パウロさんは、よし！と決意して、アレオパゴスに向かいます。

みんなはどうだろう？ 学校やお家で、聖書のことや神さまのことをお話する時があるかな。けっこう難しいよね。

お話する相手が、教会のお友だちとかで、

神さまのことをよく知っている人だったら、いろいろなこととお話できるんだけど、相手がぜんぜん聖書のことを知らないという人だったら……さて、どうしよう。

パウロさんもどうしたら、神さまのことを分かってもらえるだろうかと考えました。それでアテネの人たちがよく知っていることからお話することにしました。

アテネの人たちは、聖書の本当の神さまのことはぜんぜん知らなかったんだけど、「神さまっぽいもの」とか、「神々」ということにはとても興味があったんです。それで、パウロさんは、「あらゆる点においてあなたがたが信仰のあつい方であることを、わたしは認めます」(22節)と、そんなふうに語り出すんです。町のいろいろなところに「偶像」や「祭壇」がたくさんあったんだよね。それで、アテネの人たちに広い意味での「信仰」というものがあることは分かっていました。そこをとっかかりにして、パウロさんはアテネの人たちの心を本当の神さまへ向けようとするんです。関心が途切れないように、ギリシアの詩を使ったりもしました。「我らは神の中に生き、動き、存在する」、「我らもその子孫である」(28節)という詩です。言われ

ていることは間違っていないよね。だったら、使うんです。パウロさんはとにかく使えるものはぜんぶ使って聖書が教えている神さまのことを語っていくんです。

4. 福音を聞くということ

すると、どうなったか。だいたいこれまでだと、たくさんの人たちが、わたしも、わたしもと、神さまを信じてくれたんだね。

が、今回はそうはなりませんでした。

ある人は、パウロさんがイエスさまの復活のお話をすると、「そんなこと、あるわけないじゃん」とバカにして、お話を聞いてくれなくなりました。ある人は、そのお話はまた今度にしようと、やっぱりお話を聞いてくれなくなりました。

みんなにも、そういう経験があるかもしれないね。イエスさまの十字架が、私たちの罪を赦すためのものであったこと、イエスさまのご復活が、私たちがいつまでも神さまと共に生きる永遠の命のためであったこと。これは聖書が何度も何度も教えてくれる大切なことなんだけど、すぐに分かった！ とはなかなかならなってくれない。バカにされたりするかもしれない。いや、私たち自身も疑ってしまったり、信じられなくなることがあるかもしれない。それは、それほど神さまのことや、神さまが私たちにしてくださることというのは、私たちの理解や知恵や知識や頑張りをずっとずっと高く越えたものだから、だね。

パウロさんが一生懸命にお話したアテネの人たちはとても頭のいい人たちでした。

けれども、自分は何でも知っているからと偉そうになっていると、本当に大切なことが分からなくなっちゃうんだね。

私たちは難しいことはよく分かりません。神さまのことも知らないことがまだまだたくさんあります。けれども、神さま、教えてください。神さまの愛を、救いをもっともって教えてください。私はぜんぜん知らないのですと、そういう気持ちでお祈りして、聖書のお話を聞いていると、聖霊なる神さまが、これまた私たちの理解を越えた力を働かせてくださって、「神はわたしたち一人一人から遠く離れてはおられません」(27節)ということのを、みんなの心に刻みつけてくださいます。神さまは私を愛して下さっているということは間違いないと信じさせてくださいます。

アレオパゴスで多くの人たちは、パウロさんのお話を聞くのをやめてしまいましたけれども、でも、そのなかで信じた人たちもいました。そこに聖霊の働きがあった。

だから、みんなも、イエスさまの十字架とか復活とか、信じてもらえないんじゃないかと、ためらう必要はありません。聖霊なる神さまは必要なときに必要な力をふるってくださるお方です。

みんなに対してもそうです。神さまは、イエスさまを信じる大切なことを全部、聖霊を通してみんなに教えてください。大丈夫。今日も、神さま、ありがとう！ という感謝を重ねましょう。

(柏木貴志)

《今週の暗唱聖句》

わたしの言葉もわたしの宣教も、知恵にあふれた言葉によらず、“霊”と力の証明によるものでした。それは、あなたがたが人の知恵によってではなく、神の力によって信じるようになるためでした。(コリントの信徒への手紙一2章4、5節)

8月25日 使徒言行録17章16～34節

【幼稚科】

アレオパゴスで語る

〈ねらい〉

本当の神さまを礼拝することの喜びを覚える。

〈展開例〉

パウロさんは、伝道旅行の途中、アテネという町に来ました。そこで2人のお友だちを待っていました。待っているあいだ、お散歩していたら、ここにもあそこにも、石で作った立派な像がたくさんあります。アテネの人たちはそれを神々として拝んでいました。

神さまはたくさんいますか？……そう、ただお一人だけです。神さまを像にすることができますか？……そう！ 本当の神さまは像なんかにできません！ 神さまはきつぱりと、それをダメだと禁止しておられます。

「こんなことは間違っている！」パウロさんの心は燃え上がりました。そして、すぐに語り始めました。「みなさん、お聞きください！ あなたがたは本当の神さまを知らずに、たくさんの偶像を拝んでいる。わたくしが、本当の神さまがどなたかを、お話ししましょう」

「このお方は天と地と、すべての物をおつくりになった神さまで。すべての主であられますから、人が作った像やお寺には住まれません。一人の人間を作り、国を作り、すべてを治めておいでです。父なる神さまは、人々が御自分だけを礼拝することを望んでおられます。このお方にだけ、命があるからです。このお方とはイエス・キリストです。死者の中からよみがえったイ

エスさまは、終わりの日に、もう一度来られるのです！」

みんなはパウロさんのこと、どう思う？

パウロさん、すごいね。堂々と、勇気を出して、「それ間違っていますよ！」と言えたね。パウロさんは、そのために牢屋に入れられたこともあるんだよ。それなのに、すごいよね！

*写真を見せて（教会の近くや、町にある「偶像」の写真を事前に用意しておく）私たちの町にも、「像」が、たくさんあります。そして、これを神さまだと思って拝んでいる人がいます。おじいちゃんとか、おばあちゃんとか、お経とかを唱えて、そうしたら、助けてもらえんと思って……悲しいね。「本当の神さまは、イエスさまだよ！」って教えてあげたいね。

〈やってみよう〉みんなでうたおう♪

さあ、今日は暑いですが、お外で分級をしました。これから、みんなで讃美歌を歌いましょう。この歌声が、わたしたちの町の人に届くように、心をこめて、大きな声で、賛美しましょう（『しゅわれを愛す』など、みんなで歌える讃美歌を選んでください）。

最後まで歌ったら、天を仰いで、イエスさまに、大きく一緒に叫びましょう。「イエスさま だいすぎです。だいすぎです！」そして最後にみんなで一緒にお祈りをしましょう。

*お祈りが済んだら、時間のゆるす限り、屋外で元気に一緒に遊びましょう！

8月25日 使徒言行録17章16～34節

【小学科上級・中学科】

アレオパゴスで語る

1. 使徒言行録17：16～20を読みましょう。

①パウロはアテネで何を見、どう思いましたか。

②アテネで出会ったパウロはどこに連れて行かれましたか。

2. 使徒言行録17：21～34を読みましょう。

③パウロはその場で語りましたが、なぜそうしたのでしょうか。

④死者の復活と聞いた人たちの反応にはどんなものがありましたか。また、パウロはその結果どうしましたか。

⑤パウロの伝道は、集まったアテネの人たちに伝わりましたか。この一連の出来事を読んで、私たちは伝道についてどう考えればよいと思いますか。